

ICTに関連した健康行動を規定する要因分析

健康行動に関しては、これまで、様々なモデル、理論が提案され、健康行動に影響を与える要因について説明されてきた。ヘルスビリーフモデルにおいては、問題の起こりやすさ、問題の重要性、行動の利益、行動の障害の4つの信念が重要と考えられている。一方、ブラインドビヘイビア理論においては、行動する意識だけでは不十分で、自己効力感、主観的規範といった行動しようとする意図が、実際の行動へのあと一步を規定していると言われている。プロチャスカからの行動変容のステージモデルでは、行動しようとする意図の時間的变化に着目している。こうした、モデル、理論に基づき、行動を規定する要因に対して介入をしても、健康行動を必ずしも変えられるわけではない。たとえば、健康行動を阻害する要因がなくても全く行動を起こさない人、健康行動を阻害する要因を多く持っていて、健康行動を実施している人などは数多い。つまり健康行動の説明と介入について、従来のモデル、理論では十分に説明されていない場合がある。

行動経済学という研究領域において、自己の利益とは矛盾した不合理な行動（アノマリー）が実験的に明らかにされ、こうした行動において、一定の傾向が成り立つことが報告されてきている。この無意識下でのアノマリーを考慮した、社会の仕組みを設計し、政治、経済活動に取り入れようという取り組みは英国では世界に先駆けて始まっており、米国においても、大統領令を受けて動き出している。しかしながら、健康行動への介入にアノマリーを応用した例は数少ない。そこで、本研究では、健康行動を規定する要因、特に個人の行動意識、意図、を分析するのみならず、健康行動の実施に関して、行動経済学特性が与えている影響についても検討する。

本日の抄読会においては、健康行動ステージと各属性・各要因の関係、行動経済学的特性と各要因の関係、健康行動の実施に影響する要因のロジスティック解析の結果などを報告する。